

Title	G・D・H・ コール 英国労働者階級の政治政策
Sub Title	G.D.H. Cole; British working class politics 1832-1914, 1950
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.6 (1951. 6) ,p.388(54)- 391(57)
JaLC DOI	10.14991/001.19510601-0054
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510601-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介

G. D. H. コール
「英國労働者階級の政治政策」
(G. D. H. Cole: British Working Class Politics 1832-1914, 1950.)

飯田 鼎

カール・マルクスは次の如く言っている。「もし彼等(労働者階級：筆者註)が資本との日常闘争において卑怯にも退却するならば、彼等は必ずや何らかのより大きな運動をおこすための彼等自身の能力を失うであろう。……資本制生産の一般的な傾向は、賃金の平均水準を高めるものではなくして、それを低めるものである。労働組合はその力の無分別な使用のために失敗する。そして一般的に言えば、労働組合は現存制度の結果に對する小ぜり合いのみをこととするために失敗する。すなわちそれと同時に現存制度を變えようとせず、自己の團結力を労働階級の最後の解放のための積材として用いようとしないうちに失敗するのである」と。(賃金價格および利潤、堺利彦譯)そして英國における労働運動の歴史は、このことを如實に證明している。

英國において労働者層が一つの階級として存在を明らかにしたのは、一八三二年選挙法改正以来のことであつて、彼等の政治への關心は、階級的な利害の對立の中に次第に強まってきた。いふまでもなく労働組合は、労働者の最も基本的な民主的な要求をモメントとして發生したものである。それは現實社會の階級の本質に對する何らの深い洞察をもたぬ労働者たちによつても、その日常的な経験の中から自然的に發生しうる。だがこの發生史的事實は、労働組合の政治的な中立性を根據づけるものではない。なぜならば政治は究極するところ經濟の集中的表現であり、労働者階級が集中的に組織されるところ、そこに政黨が必然的に生れるであらうから。

一九〇〇年ポア戦争の帝國主義的興奮をよそに、ささやかな誕生をとげた労働黨は、實は一八三二年以来半世紀以上にわたる労働者階級による政治的な闘争の結果であつた。労働者階級がどのようにして、彼等の代表を議會におくることができたか。G. D. H. コールはこの間の事情を本書において詳細に物語っている。

二

は次の六つの點にかかつていた。第一、成年男子の普通選挙權、第二、平等な選挙區、第三、議員の毎年改選、第四、議員資格の財産制限を廢止すること。第五、無記名投票、第六、議員を有給とすることであつた。

一八三二年の選挙法の改正は、産業革命にともなう社會的經濟的變動の結果として、勃興したブルジョア階級に参政權を與えたにとどまり、十八世紀の遺物である腐敗選挙區を廢止するために、ともに努力した賃金労働者は少しも得る所がなかつた。いわゆるチャーチスト運動とは、このような當時の支配階級の不當な政策に對する労働者階級の大規模な反對運動であつた。しかしながら多少の斷續があつたとはいへ、十年の長きにわたつてつづけられたこの運動の指導者たちは、窮乏にさいなまれた労働者階級の出身であるよりも、むしろブルジョア急進主義者であるか、精々生活不安のない熟練工であつた事實を見逃してはならない。

フランシス・ブレースやヘンリー・ハントは中産階級の出身であつたし、ウィリアム・コベットやオコンナーの如きも地主階級の出身であり、ウィリアム・ロベットやヘザリントンは熟練工であつた。従つてこれら指導者が労働者階級の利益を代表して議員となつたとき、かれらが労働者による獨立の黨派を結成することを考へなかつたのは不思議ではない。トリー黨(後保守黨)に反對であつた如くホイッグ黨に對しても不満であ

G. D. H. コール「英國労働者階級の政治政策」

つたかれらは、中産階級の利益を代表する急進主義者、もしくは自由主義者の第三黨を結成しようとしたのである(G. 15)。だがチャーチスト運動の大きな原動力となつたものは工業労働者であつた。一八三七年の産業不振にともなう炭坑労働者の失業や北部の手織工の窮乏は、院外救助法の廢止と相まつて益々拍車をかけられた。まことにチャーチスト運動は一方にブルジョア急進主義者の不満と、他方労働者階級のかつてない窮乏化より生れた(G. 18)。そしてこのことはこの運動が何故にヴィクトリア時代の開花期に衰えたか、その理由を裏づけてゐる。

三

ヴィクトリア時代は實に資本主義の青春時代であつた。賃金の上昇・労働十時間法案の通過などの労働條件の向上とともに、労働運動はその主流を協同組合運動にうばわれ、政治的な闘争意識はおとろえたが、ブルジョア急進主義者の運動は全く滅びたのではなかつた。すなわち自由貿易主義者ジョン・ブライトを中心とする國民改革同盟と、他方労働組合によつて支配される國民改革連盟とは、北部の急進主義者の援助を得て、普通選挙獲得の運動にのりだしていった(G. 23)。そしてマルクスの「資本論」が初めて世に出でた一八六七年には都市労働者は選挙權を與えられ、有権者の數は飛躍的に増大した。そしてこの結果は何よりも労働者の組織的な政治運動を活潑にし、翌一八

五五 (三八九)

六八年には労働代表連盟が誕生した。だがその最大の缺陷は、一貫した理論をもたないことであり、「ジユンタ」といわれたW・アレンやT・アップルガースなどの指導者が、労働者の政治的な自覚に對して無關心であり、むしろ反動的でさえあつたことである (p. 53)。彼等は自由黨に全くの信頼をおいた。アレクサンダー・マクドナルドとトーマス・バートが最初の労働者代表として議會へ送られたとき、彼等が自由黨の大きな保護のもとにあつたことは事實であつた。このようにして熟練工と自由主義者の妥協としての「自由労働」(Lib-Lab)の時代は一八八〇年代、不熟練労働者の奮起と社會主義の復活までつづいた。まことに資本主義の高度化と社會主義の復活こそ、獨立労働黨を結成させる契機となつた。

四

英國社會に及ぼした思想の影響を考察するとき、ペンサム功利主義はけだしその最たるものであろう。一八八〇年代におこつたフェビヤン社會主義が、その根底に功利主義をいだいていたという何よりの證據は、それが自由主義者は勿論、保守主義者をも自らの同志とすることを辭しなかつた所にある (pp. 122-123)。そしてこれは労働黨の政治團體たるI・L・P・(獨立労働黨)にとつて理解し難いことであり、バーナード・ショーはこれがために非常な努力を拂つた (p. 124)。

だが英國労働運動の發展と労働者の政治的意識を育てあげたものとして、われらは不熟練工を中心とする新組合運動の歴史的な意義を忘れてはならない。一八八八年のマッチ女工のストライキが、はからずもアンニー・ベザント夫人の熱情と激勵によつて効を奏して以來、ガス事業従業員のストライキ、更にトム・マンとジョン・バインズによるドック・ストライキと、窮乏と壓迫の中に忘れられていた不熟練工は、一齊に現存制度に對する闘争の火ぶたを切つた。そしてその指導的勢力となつたものこそ、社會民主連盟と獨立労働黨であり、更に又フェビヤン協會であつて、社會民主連盟はマルクス主義の立場から獨立労働の先頭に立つた。

しかしながらそれだけではない。労働黨の誕生のためには、他の幾人かの偉大な個性の力があつたことである。ヘンリー・ジョージの「進歩と貧困」は平易な表現と熱にみちた口調をもつて當時の人々を啓蒙し、ロバート・ブラッチフォードの雑誌「クラリオン」は、民衆に社會主義に對する限りないあこがれの心をおこさせ、又ケーヤ・ハーディの宗教的な情熱は深く人の心をうつものがあつた (pp. 123-124)。しかしそれにもまして資本制社會の害悪を探求し、これを人々の前に明らかにしたものは、チャールズ・ブリスの大著「人民の労働と生活」であつた。労働黨結成の中心的な勢力であつたI・L・P・は、一八九〇年代においてその發展のために容易ならぬ努力を拂わ

ねばならなかつた。ケーヤ・ハーディとラムゼー・マクドナルドは自由黨勢力からの脱出と保守黨への對抗のために、一九〇〇年まで幾度か落選の憂き目にあつたからである。しかもイデオロギーの相違にもとずくI・L・P・とS・D・F・(社會民主連盟)の反目ははげしかつた (p. 150)。

五

それにもかかわらずI・L・P・の努力は無駄ではなかつた。ついに労働組合運動と社會主義との合同ともいへべき労働代表委員會がメモリアル・ホールで開かれ、労働黨建設の新しい一歩がふみ出された。ついでボア戦争中に行われたカーキ選挙(軍國主義的な選挙のこと)は、劣悪な条件のためにケーヤ・ハーディとリチャード・ベルの二人をあげただけにとどまつたが、とにかく労働代表委員會の成立は労働運動史に一時期を劃した。だが誕生後間もない労働黨の前途は、必ずしも安易な祝福されたものではなかつた。一九〇一年のタッフ・ヴェール鐵道事件は、ストライキが契約の破棄であり、労働者はその與えた損害に對し雇主に二萬三千ポンドの賠償をすべきことの判決をもたらした。これは正に晴天における霹靂であつた。一時労働運動は危殆に類するかの如く見えたが、指導者たちの政治的な意識はこれによつていささかも弱められることはなかつた。それはまことに生きるか死ぬかの問題であつたからである (p.

G・D・H・ホール「英國労働者階級の政治政策」

169)。
一九〇六年の總選挙は、ケーヤ・ハーディ以下二九人の労働代表議員を選出させたが、かくするうちに第二の政治的な幻滅がおとずれた。オスボーンの判決がこれである。一九〇八年、労働組合の資金を政治的な目的に使用することに反對した鐵道従業員合同協會の書記オスボーンの見解が、上院において純粹に正しいと判決されたとき、問題はオスボーン自身労働黨員にいてかつ自由黨員であつたことである (pp. 126-127)。ここに於いて労働黨が社會主義政黨となるためには、何よりも自由黨との訣別をなさねばならなかつたことはいらまでもない。そしてその後未曾有の大戦は彼等にこのことを體驗させたのである。

以上その内容を紹介したが、本書は大著「一九一四年以來の労働黨史」の序説をなすものであつて、説明にやや重複の傾向がないでもない。しかし労働黨史と政治史をつなぐものとして、注目すべき著作であるといえよう。

(一九五一・五・九)